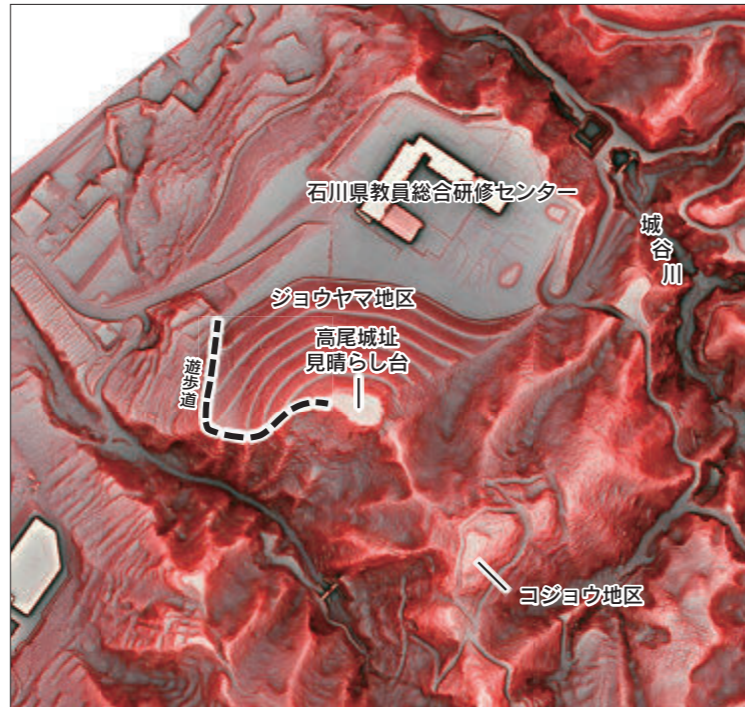


## 城主・富樫氏の系譜

- 富樫氏の始まり 富樫氏は、平安時代の武将・藤原利仁の流れをくむ加賀藩藤氏の一族で、高橋川中流域の富樫郷を拠点としていました。利仁から数えて7代目の家国がはじめて「富樫介」を称し、康平6年(1063)には野々市に館を築いたと伝えられています。
- 富樫氏の台頭 加賀地域で勢力をもっていた林氏は、承久3年(1221)の「承久の乱」で朝廷方だったため没落し、幕府方の富樫氏が加賀武士団の筆頭となりました。これ以降、守護を歴任する北条氏一門の代官を富樫氏が務めることになりました。
- 富樫館 富樫高家は加賀国守護に任じられ、建武2年(1335)に守護所を野々市に置きました。
- 富樫氏の分裂 富樫氏7代の教家が嘉吉元年(1441)に失脚したことを発端に一族の分裂が始まりました。
- 高尾城落城 長享2年(1488)、加賀の一向宗門徒と結んだ富樫泰高の攻撃で、守護富樫政親は敗れ、立て籠もっていた高尾城も落城しました。
- 富樫氏の衰退 戦国期には、富樫泰高とその子孫が加賀国の守護職を継承しましたが、実権は一向宗門徒に移り、富樫氏の勢力は衰退しました。
- 富樫氏の滅亡 元亀元年(1570)、室町将軍足利義昭の命を受け、織田信長に呼応した加賀守護・富樫晴貞は、金沢の伝燈寺で一向宗門徒に討たれ、富樫氏は滅亡しました。



高尾城跡周辺の微地形表現図  
航空機からレーザー光で計測して作成する測量図で  
広域の詳細な地形を視覚的に把握できるものです。

## 高尾城跡へのアクセス



電子国土WEBデータ(国土地理院)をもとに加工して作成

- お車で  
北陸自動車道「白山IC」から約35分
- バスで  
北鉄バス「高尾南二丁目」下車、徒歩約15分
- 【協力】  
石川県教員総合研修センター  
野々市市教育委員会生涯学習課(表紙写真)
- 【編集・発行】  
金沢市文化スポーツ局文化財保護課  
石川県金沢市広坂一丁目1番1号  
TEL 076-220-2469
- 【注意事項】
  - 高尾城址見晴らし台までは常時通行できますが、コジョウ地区は民有地のため、立ち入りはご遠慮ください。
  - ごみは各自お持ち帰りください。

## 加賀守護富樫氏の城

# 高尾城跡

## コジョウ地区



高尾城は、標高約186mの富樫丘陵先端部に築かれた山城です。長享2年(1488)、この城に立てこもった加賀守護・富樫政親が、一向宗門徒による一揆に敗れたことで、加賀は「百姓ノ持チタル国ノヤ(ヨ)ウ」と呼ばれる時代へと移行しました。この出来事は、戦国時代のはじまりを象徴する事件として知られています。

現在、城の中心部とされるジョウヤマ地区は、土取りにより大部分が失われ、一部が高尾城址見晴らし台として痕跡をとどめるのみですが、見晴らし台から尾根をたどった先のコジョウ地区には、主郭・曲輪・堀切・切岸など、山城の構造を伝える遺構が残っています。令和5年の発掘調査により、従来、16世紀後半と考えられていたコジョウ地区の城郭遺構が、14世紀後半～15世紀代の富樫氏治世を中心に築かれたことが明らかとなりました。

## 金 沢 市

# 高尾城跡の遺構

金沢市では令和5年度にコジョウ地区で発掘調査を実施しました。



## 北堀切

現在の見晴らし台の南東下にある幅約10mの堀切で、ジョウヤマ地区とコジョウ地区を結ぶ尾根道の通行を制限するために造られたと考えられます。



## 主郭

コジョウ地区の最高所に位置し、約500m<sup>2</sup>の平坦な上段と緩やかな下段からなります。調査区1の上段では渡来銭「熙寧元寶」、下段では14世紀後半~15世紀前半の土師器皿や古瀬戸平碗が出土しました。上段と下段の間は、高さ約2.2m、最大斜度約60度の切岸となっています。現在は緩斜面に見える下段は、地中で二段の帯状平坦面となっていて、下段のくぼ地に人頭大の川原石が集められているようすが確認されました。



## 東内堀切

高尾城跡の東側を流れる城谷川から主郭へと続く尾根筋を断つ2本の堀切(東外堀切・東内堀切)のうち、主郭寄りに位置し、幅約15m、長さ約25m、現況での深さ約7mです。発掘調査は実施されていません。主郭側の堀岸は急傾斜な切岸となっています。



## 南堀切

コジョウ地区南側の尾根を断つ東西方向の堀切で、幅約20m、長さ約35m、深さ約6mです。調査区4では、堀切の一部が後世の盛土により約1m埋められていましたが、遺構は地下に良好に残っていました。堀底の断面形状は丸く、調査区内では底幅約5.5mまで確認しました。堀底から旧表土面までは約1.2mの土砂が堆積しており、堀の斜面の最大傾斜角は、外側で約55度、内側で約20度でした。



- コジョウ地区には、城郭遺構が今も良好に残されています。尾根伝いにつながるジョウヤマ地区とは密接な関わりがあったと考えられます。
- 従来、コジョウ地区の遺構は16世紀後半に築かれたと考えられていましたが、令和5年度の発掘調査により、14世紀後半~15世紀代を中心とする、富樫氏治世下の山城であることが明らかになりました。
- 15世紀後半代の遺物も出土していることから、長享2年(1488)の高尾城落城時にもコジョウ地区が使用されていた可能性があります。
- 主郭北側には16世紀後半の山城に特徴的な縦堀状の凹凸地形の存在が指摘されていますが、その時代の遺物は発見されていません。



主郭から出土した遺物



## 東外堀切

コジョウ地区最大の堀切で、幅約15m、長さ約50m、深さ約8mです。堀の底を断ち切るように発掘した調査区3では、堀底は平らで底幅約2.7m、現在までに約1.8mの土砂が堆積していました。また、堀の外側斜面では、硬い砂の地層を約50度の急傾斜で削り出した切岸が確認されました。

### 【用語解説】

- 曲輪(くるわ) 尾根や斜面を造成した平坦面で、土塁・切岸・堀などで区画された区域
- 主郭(しゅかく) 城の中で中心になる曲輪で、近世城郭の本丸にあたる場所

- 堀切(ほりきり) 尾根を伝って進入する敵を防ぐため、尾根を断ち切り空堀としたもの
- 切岸(きりぎし) 斜面下からの敵の侵入を防ぐため、斜面を削って急傾斜の断崖としたもの
- 縦堀(たてぼり) 斜面に対して縦方向に溝状の堀を掘り敵の横移動を防いだもの